

論文要旨

外国人生徒の学びを支える教師・支援者の意識変容の学習

高梨宏子

本研究の目的は、外国人生徒に指導・支援をする教師・外国人支援者の意識変容の学習(クラントン 1999)のプロセスを明らかにすることである。外国人生徒は教科学習に取り組むことが難しく、母語保持育成の機会が少ないという課題がある。本研究では、外国人生徒の母語と日本語を使って学習する「教科・母語・日本語相互育成学習(以下、相互育成学習とする)」による授業・学習支援を行った公立中学校の国際教室の取り組みに注目した。この取り組みに参加した教師・支援者が、外国人生徒の母語を使うことに対してどのような意識を持ち、変容するのかを分析した。

第1章では、研究の背景として外国人児童生徒が置かれた状況について検討した。その上で、本研究の研究対象・研究目的を示した。日本語を母語としない外国人児童生徒の学習上の課題は多岐にわたる。中でも、取り組みが困難である教科学習・母語保持育成の必要性を指摘した。こうした課題に対し、外国人児童生徒の状況は教師次第で良い方向に転換可能であると考えエンパワーメント理論(Cummins 2011)をもとに、本研究では教師・支援者の意識変容に注目することとした。

第2章では、外国人生徒に関わる教師および支援者に関する先行研究を検討した。先行研究では、教師は実践の中で固定的ではなく状況を読み取り解釈しながら変化をしていることが明らかにされている。また、先行研究では、支援者が学校に与える影響があることが確認され、中でも、外国人生徒と母語を同じくする外国人支援者は必要な資源を生み出す存在であると位置づけられた。教師・支援者は、外国人児童生徒への授業・支援実践から学び、自己成長を遂げることもこれまでの研究から示唆されている。しかし、相互育成学習における教師や支援者を対象とした研究は少なく、今後も研究の蓄積が必要である。そこで、本研究では教師・支援者の意識変容が重要であると考え、成人学習理論である意識変容の学習理論を分析の枠組みとした。

第3章では、研究課題と研究方法を示した。本研究の研究課題は、3つある。第一は、「母語を使った取り出し授業を実施した教師は、母語を使った授業に対しどのような意識を持ち、実践を通してどのように変容するのか」、第二は、「国際教室担当経験を持つ教師は母語を活用した学習支援に対してどのような意識を持ち、その意識は実践を通してどのように変容するのか」、そして第三は、「外国人支援者は自身の母語を活用した学習支援に参加し、支援活動に対してどのような意識を持ち、実践を通してどのように変容するか」を明らかにすることである。研究対象者は、(1)授業実践を行った教師、(2)国際教室担当教師、(3)外国人支援者である。研究方法としては、PAC分析(内藤 1997)を採用することとした。

第 4 章では、授業実践を行った教師を対象とし、PAC 分析を実施した。国際教室の取り出し授業において相互育成学習による教科の授業に取り組んだ。外国人学習支援者との協働で半年にわたる授業実践を重ね、外国人生徒の学習、育むべき力の捉え方が問い直されていった。また、生徒が学習に取り組む姿勢を見てきたことから、授業の在り方についても再確認をするようになった。さらに、外国人生徒の母語が授業の中で扱われることで、その存在を意識するようになった。日本語も外国人生徒のどの母語であっても平等に捉えるような認識になっていった。そして、自身の母語である日本語を問い直す機会となっていた。

第 5 章で対象とした国際教室担当教員は、授業実践は行わず、学習支援者による相互育成学習の学習支援の場を参与観察とコーディネートしていた。この教員は国際教室を長く担当してきており、当該モデルのような学習の進め方は経験がなく新たな取り組みであった。この教員にも PAC 分析を実施した結果、1 年間の参与観察の結果、外国人生徒の母語の役割を新たに見出すようになっていた。また、相互育成学習によって母語保持の機会を持ち、教科学習に取り組むことは、展望の見えにくい外国人生徒の進路やその先の将来においても意義があることを見出している。経験によって作られた、母語や進路に対する意識が、その参与観察を通して徐々に変化していくことが分かった。

第 6 章では、外国人支援者を対象とした研究では 2 名の中国出身の支援者に PAC 分析を実施した。日本での子育てをした母親でもある外国人支援者は、国際教室の学習支援参加を通して、母語による学習は外国人生徒の学習意欲を向上させ、未来の選択肢を広げるものであることを認識した。また、母語を使って学習に取り組むことは、家庭学習の質を上げること、学習を通じた親子のつながりを増やすことにつながると考え、母語の保持育成の必要性に対する意識をより強くしていった。

第 7 章では、結論として、研究のまとめと考察、本研究の貢献、課題を述べた。本研究では、教員・学習支援者が外国人生徒の母語を意識化し、母語を補助的な役割ではなく学習を促す役割へと認識を変えていった。さらに、外国人生徒の将来の選択肢を広げる役割認識をもつようになった。授業のあり方を問い直したり、外国人生徒の進路や将来に対する見方を変容させたりすることも確認された。また、周辺の状況にあった外国人支援者が、自身の母語を活用し貢献することで、外国人生徒の言語資源である母語を使い、学習支援することは、これまで問い直されてこなかった外国人生徒の母語や教科学習への取り組みに対する前提を問い直す機会ともなっていると考察した。